

Title	「アリストテレスの『流通の正義』 = マルクスの其解釈に関する疑」 (其三) 中に於ける福田博士の拙稿に対する批難に就いて
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.3 (1928. 3) ,p.447(155)- 455(163)
JaLC DOI	10.14991/001.19280301-0155
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280301-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ためであつたが、他の一つは二時間以内に Whitehall に行くことが出来たからであると云ふ。この挿話は晩年に於ける彼の政治的嗜好を物語る材料となり得るであらう。

Sir William Ashley の死は確かに學界のために大なる損失たることは云ふまでもないが、私情を語ることを許されるならば、筆者が滯英中受けた學恩の一部をも果し得ない中に訃音に接したことは最も遺憾に耐えないところである。(昭和三年二月十三日稿)

「アリストテレースの『流通の正義』」マルクスの
其解釋に關する疑「其三」中に於ける福田博士の
拙稿に對する批難に就いて

高橋 誠 一 郎

余は本誌一月號の誌上を借りて福田徳三博士が雑誌「改造」本年新年號に於いて、余の貧しきアリストテレース研究の一部に對して下されたる非難攻撃に就き、聊か秃筆を呵して應酬の禮を執り、吾人は後輩を惠まらるゝこと厚き福田博士が、必ず「改造」二月號若しくは三月號に於いて、吾人の所言に對し更らに應酬せらる可きことを密かに期待せり。果然吾人の期待は裏切らるゝことなく、同誌三月號所載の氏の論文中には屢々余に對して罵聲を放たれつゝあるを見る。然れども吾人の甚だ慊らざるは、博士の論難が聊も問題の主點に觸れ居らざるの一事なり。

博士が最初余を難せられたる主要の點は、余が今日の經濟學に對するアリストテレース經濟學說の貢獻を一掃的に否認する者なりと看做されたるに在り。余は博士の批難を以つて不當とし、余の意見は、近世の經濟學が其の主潮に於いて、決してアリストテレースに發せずして、アリストテレース及びスコラ哲學に對する反抗の時代に其の萌芽を發したりと做すに存する旨を再論せり。博士

は這回の論文に於いては毫も此の點に觸るゝ所なし。博士の論文は未完なり、而して博士は余が博士の論文を終末まで氣永に讀過するならば、余の非難が當然撤回せらる可きものと樂觀せらるゝなり。博士にして此の言ある以上、余は博士の論文の完結を何ヶ月か若しくは何ヶ年かの後に待ち、果して余の非難が當然撤回せらる可きものなるや否やを檢討するの耐忍を有せざる可らず。然れども苟かに惟ふに、博士の如き賣文の要なき大家先生は其の研究論文を斷續常なく、大衆向の雜誌に掲載して、他の誤解を招くを避け、渾然たる一編として徐ろに世に示さるゝの道を選ばる可きものには非ざるか。

二

博士が這回の論文中に於いて余の名を擧げ、余の論文を掲げて非難せらるゝ所は、單に余の文を以つて支離滅裂と語りたるに過ぎざるか、若しくは枝葉の點に關する挿語に過ぎざるを以つて、敢て茲に再び本誌を汚すの要なきが如きも、余は此の老先輩が其の文中に於いて特に余の論文の「如何に杜撰、孟浪、散漫にして、而も徒らにペダンチックなるもの」なるかを明かにするに努められたる多大の勞に對して一言なき能はず。余は余に見落しなき限り、博士の余に對する非難の全部に就いて回答す。

第一の余に對する挿註(五三頁上段)即ち「高橋教授の論文の到底常人の理解し得ざる底のものである所以は、狹義の正義論其のもの、解説の支離滅裂より來るものなるを鑑みなければならぬ」云々に就いては吾人既に之れを云へり。爰に再び贅せず。第二の挿註(五三頁下段)即ち氏がマルクスの所説を河上肇宮川實氏の譯文並びに高島素之氏の其れより長々と引用せられたるは決して余に對する駁論の爲めに非ず、博士の論文の中心問題とする箇所なるが故にして、余の自尊心の過大なる博士の論文の組立て方をすら諒解するを妨げたるものと説かれたる點に於いても、特に言ふ可きことなし。博士の此の長き引用が必ずしも余を駁撃するが爲めのみとは余も思惟せず。而も忌憚なく申せば、事實余は博士の論文の組み立て方を未だ諒解せず。博士の長論文は二十二節にして尙ほ完結せず、或ひは前回の誤植(?)を次回の本文中に於いて長々と訂正し、或ひはプッフエンドルフの商科大學所藏本の來歴を尋ねて、其の寄附者たる左右田氏の爲めに無量の感慨をよせ、低徊盡くることなき此の論文の組立を今に於いて知ることとは決して常人の企及し得る所に非ざるなり。余は唯だ余に對する博士の攻撃に興味を感じたるのみ。

第三に博士は余がアルベルトスを擧げて、其の弟子トマソ・ダクイノに就いて言及せざるの不當を難せられたり。余は余にして中世の經濟學說に及ばせるアリストテレスの影響を探索するを目的とせば、勿論聖トマソの名を逸すること能はざりしなる可し。而も余は爰には單に交換的正義の意義を明かにするが爲めにアルベルトスより數句を引用せるに過ぎず。(縱令ひ开がヘリオドロスのパラフラスに出でたるものなりとするも)。余は決して白頭の豕兒を異として、人に誇らんとするに非ず。河東に至らば、群豕皆な白きを知るも、而も尙ほ説明の便宜上之れを引けるに過ぎざること既に云へるが如し。

三

博士は其の舊稿「トマス・ダキノの經濟學說」に關説し、「當時は原文を讀みこなす力もなく」云々と謙遜せられたり。(五八頁)。「トマス・ダキノの經濟學說」は實に四十年版「經濟學研究」の卷頭を飾れる一大長篇にして、篇中拉典原文の引用多く、讀む者をして博士の讀書力の強大なるに驚嘆せしめたり。然るに余は當時此の雄篇の重要なる大部分が、アッシュリー氏の「英國經濟史」中の一部と「奇蹟的時合」を有すること、並びに同論文中に引用せられたる拉典文の大部分が、同じく同書中に引用せられつゝあることを深く怪めり。然るに今や博士が當時「アシュレー氏の英國經濟史中の叙述」其の他を頼りとして其の筆を執られたることを告白せらるゝに及んで、多年の疑團一時に氷解せり。而も少しく明敏なる讀書子は既に野村兼太郎氏のアッシュリー英國經濟史譯の現れたる今日、余の如き暗愚なる疑問を抱くもの存せざりしなる可く、又た今更ら事新しく博士の自白を待つのもあらざりしなる可し。

博士が爰に「其の後、高橋誠一郎教授門下の某氏が、主として、トマンの利子論を研究せられたる基督教利論考」とか題する有益なる研究が公刊せられたるやであるが、私は不幸にして其書を見ることを得ない「云々と説かれたるは恐らく打村三氏著一九二七年版「中世教會法的利論考」(久我書房刊)を指せるなる可し。余は帷を垂れて道を説けることなく、余の門下に贊を執つて教を乞へる者を有することなし。余には「門下」なるものなし。打村氏は唯だ余が同窓の後輩に過ぎずして、同氏の論文指導の任に當りたる者も、余に非ずして、小泉信三氏なり。此の點に於いて博士流の語法を以つてすれば、打村氏は「小泉信三教授門下の秀才」なり。従つて同氏は余の如き淺學菲才の流

を汲むものに非ず。余は唯だ小泉氏及び打村氏の依頼によりて之れに序文を草したるに過ぎず。一言打村氏の爲めに辯ず。

博士は本編に於いて従來の「トマス・ダキノ」を改めて「トマン・ダクキノ」と發音せられたり。余は久しく「アキノ」の「トマス」若しくは San Tommaso d'Aquino と記せり。「トマス・ダキノ」にては如何にも鵠的の發音なりと信じたり。而も我が國には博士に學びたる發音をなす者、可成りに多かりしが如し。先輩、後輩を誤るの大なる、此の一些事にては知らる可し。

四

六〇頁下段の挿註は單に博士の新たに紹介せられんとするアリストテレスの正義論と余の曩きに行へるものとの對照を讀者に向つて希望せられたるに止まるが故に、吾人に於いても言ふ可きことなし。博士の意は恐らく自己の解説が、余に比して優ること萬々なるを示さんとするに在るものなる可し。西諺に曰く、「鴉も猿も其の子を以つて最も美しきものと思惟す」と。

六五頁上段の挿註は稍や重要な意義を有せり。博士は爰にプラトーンが正義を以つて人間精神の本質によるものなりと做せるに對し、アリストテレスは、正義が政治的動物としての人間の本質の發展より生じ來るものと前提すと論じ、而して余が此の點に於いて、アリストテレスは這般の概念をプラトーンより受けて之れを完成せるなりと云へるを非難せられたり。然れども博士よ、乞ふ余の文を正讀せられよ、吾人が爰に「彼れは這般の概念をプラトーンより受けて」云々と云へるは決して、博士の云ふが如く、正義概念の起源に關するものに非ずして、アリストテレスが分配

的及び補正的正義に關して言説せるの點なり。プラトーンは「法律篇」第六編に於いて平等に二種あることを述べたり。即ち一は榮譽の分配に際して國家若しくは立法者によりて何等の困難なく誘致せらるゝ所なるも、他はさまで容易に認識せられざるものにして、優者にはより多く、劣者にはより少なく、各々の本質に準じて與ふる所のものなり。アリストテレーヌは這般の概念を補正し、發達せしめたり。彼れは分配的正義を以つて受領者の價值又は效績に従つて、國家の成員間に分配せらる可き名譽、富及び其の他のもの、分配に關するものなりと觀たり。配分は常に畫一なる價值の標準に従つて決定せらる可く、并は這般の標準に従つて過少若しくは過多たるを許さる可きに非ずと雖も、而もアリストテレーヌは這般の標準其の者の何たるやを以て萬人の悉く一致すること能はざる所と看做せり。次いで彼れは補正的正義の説明に入り、之れを以つて人と人との間の行爲に於いて矯正物たるものと定義せるなり。并は任意的行爲に在つては、其の兩當事者に對して利得及び損失の平衡を維持し、非任意的行爲に於いては犯罪と刑罰との均衡を維持し、總べて平等の破毀を矯正するに在るなり。

茲に吾人が任意的行爲には「購入賣却、貸與、質入、借受、寄託、貸貸借」の如きもの存すと譯したるを博士は不當とし、「貸與」は「消費貸借」、「借受」は「使用貸借」、「質貸借」は「雇傭、請負、貸貸借」と稱す可きことを教示せられたり。ὀψιστολογία は、余の座右に存する Liddell 及び Scott の希英辭典には、單に money-lending と譯され、χρηστικὸν ἢ a using, employment, use made of a thing. のみ記され、前者が後世の羅馬法に於ける mutuum の如く確然 loan for consumption. 後者が commodatum

の如く loan for use. の如き意義を有するや否やを知るに苦みたるを以て、殊更らに「現代離れ」のせる譯字を使用せるなり。殊に χρηστικὸν の譯語に惱みたるを以つて特に希語を記入せるなり。μίσθωσις は a letting for hire とありしを以つて、果して羅馬法の locatio conductio の如く、物若しくは勤務に關するものにして、locatio rei, operarum, operis facienti. の三形態を有するものなりや否や不明なりしが故に、姑く前記の如き譯字を使用せり。拉典譯の locatio, conductio の意義より推して博士は μίσθωσις の意義を推定せられたるものには非ざるか。

博士は此の譯字の點に於いて、余が博士を難じて漫然余の文を卒讀して、直ちに不當の攻撃を敢てせるものと云へりと稱せらる(七二頁)。此の譯文答めは「改造」三月號の分に於いて初めて現れたるものなり。然るに余が博士の舉示せらるゝが如き言語を以つて博士を難じたるは本誌一月號に於いてなり。余は昨年十二月執筆の際に於いて早く本年二月十九日に於いて初めて讀める博士の所言を知るの千里眼を有し、之れに對して非難を加ふ可き神的能力を有することなし。余が本誌一月號に於いて博士の批評を難じたるは全然別箇の諸點なり。而も博士は是れ等の諸點に就きては殆んど言及せらるゝことなくして、而も此の譯字の點に於いて之れを云々せらる。勝手なる者よ、汝の名は福田博士の論法なり。又た博士は余がア氏の原文を解し得たりや否やを疑はれたり。余は固より希語を讀みこなし得たりとは言はず。博士は或ひは希語に精通し居らるゝかも知れず。而も尙ほ博士は短少なるア氏の譯文を草するに當りても、矢張り ロッス氏の英譯を頼りとせられざるを得ざるの人なり。

博士は六七頁下段の註に於いて、余の普遍的正義及び特殊的正義に關する説明が極めて無造作にして到底氏の其れに及ばざるが如き口吻を漏されたり。余は此の點に就いては敢て言はず。博士は又た七〇頁下段に於いて、「アリストテレス經濟學說評論家中、今日まで一人も指摘せることなき點に關し、余が全然之れに暗示をすら與へざりしを以つて「アリストテレス經濟學」を論ずるの資格なきものと痛言せらる。偶々博士の氣附かれたる點が果して如何なる重要性を有するものなりやは疑問なり。而も博士が其の發見を以つて獨り得々たるは尙ほ恕す可し、他人が此の點に氣附かざりしを咎むるは必ずしも當を得たるものに非ざる可し。自己の拾ひたる小石を他人が拾はざりして之を咎むるに等し。

博士は余の文を以つて兒童の戯墨「へへの、もへじ」に類するものなりと稱せられたり。余の文章の稚拙、或ひは小學兒童の其れに比す可きものあらん。而も、河上博士譯資本論中の誤謬の指摘、「改造社」版資本論の稱揚、スーション及び余に對する攻撃、自己の誤植の訂正、近く逝去せる後輩に對する追想、等、等、等より「アリストテレス流通の正義」一篇を組成せられんとしつゝある博士の勞作は、恰も「へへののもへじ」を連ねて靡ろ氣ながら人面を描かんとする兒童の試みにも似たらずや。

五

博士は最後に自己の舊文には許し難き誤謬、杜撰の存することを認められ、余によりて十數年前の舊稿が引用せられたることをかこたれたり。而も博士の舊文は、吾人輩の舊文と異なり、一度、

雑誌論文として現れ、再び、論文集集中に入り、三度び其の改訂版に掲げられ、四度び博士の全集中に編入せられて、十數年前の舊文は宛然昨今の近稿と等しく世上に流布し、其の愛讀者少なからず、従つて吾人が之れに就いて一言する、亦た必ずしも咎む可きに非ざる可し。余の如き、偶々誤られて、不本意ながら世に出したる拙著、一二存せざるに非ざるも、初版盡くると共に直ちに之れを絶版せしめて、再版の需めに應せず。其の完膚なき訂正を志して、然も成らず、懊惱に懊惱を重ねつゝあるなり。

「學問の前には、師もなく弟もなし」。博士よ、余が直言を叱責すること勿れ。

(昭和三年二月十九日夜)